

2017年1月7日（日）

主 題：「きょう、もし御声を聞くなれば」
一心をかたくなにはいけないー

テキスト：ヘブル人への手紙3章7～11節

はじめに

- ・ 今日、新年礼拝を皆様とともに迎えることが許され感謝します。
2017年が始まり、速くも1週間が経過しました。皆様、いかがお過ごしでしょうか。
- ・ さて、人生は一種の旅のようです。旅にもいろいろあります。最近、流行りの名所旧跡を訪ねる旅もあれば、道がない険しい道をかき分けて行く冒険のような旅もあります。すでに先人が道を作ってくれた道を歩むならば、比較的安心でしょう。その道は、そんなに大変ではないかも知れません。
- ・ しかし自分にとって未知の世界であるならば、それは分からないことばかりです。ですから失敗もありますし、苦い経験もしなければならぬことになりかねません。あなたの人生の旅は、いかがでしょうか・・・？
どんな人生の旅を過ごしておられますか・・・？
- ・ ところで、私たちの信仰生活もまた、一種の旅であると言えましょう。
聖書は旧約聖書時代のイスラエルの民が、エジプトから約束の地に入るまでの旅を、信仰生活になぞらえています。そしてそこから、私たちの信仰生活で大切な教訓を学ぶことを教えています。
- ・ 新年を迎えて、私たちは人生の旅路、そして信仰の旅路を次の2点から学んでいきたいと願います。

大切なポイント

1. 歴史からの教訓

1) 出エジプトしたイスラエルの民

- ・ 私たちは人生において、過去の教訓から学ぶことができます。聖書は、神が一つの民族であるイスラエルを選ばれ、神と人類との関係の「型」とされました。イスラエルの民の旅路は、私たちに貴重な教訓を教えています。
- ・ かつてイスラエルの民は、400年間エジプトで奴隷の身でした。彼らは奴隷として、束縛と困難を味わいました。口で言うことは簡単ですが、400年間も奴隷の生活を強いられるとは大変なことです。奴隷とは王の意思ひとつで、生きるも死ぬも決まるものでした。権利や自由等は一切ありませんでした。
- ・ そこでイスラエルの民の強い願望（祈り）は、当然のこと、奴隷の身から一時も早く解放されることでした。時の王パロは、それをかたくなに拒否しました。しかしイスラエルの神は民の祈りを聞き入れ、パロ王に10の災いを送り、イスラエルの民を救い出されました。
- ・ 出エジプトできたイスラエルの民は、紅海を渡り、自由を手に入れました。それは彼らにとって、非常に大きな喜びでした。400年もの長い間、束縛と自由を奪われた

民は大きな歓喜に満たされました。彼らの喜びはどんなに大きなものであったかは、容易に想像できます。

- たとえば、最近の歴史を見ても、同じようなことが言えましょう。1989年11月9日、あの「ベルリンの壁」は崩壊しました。壁が崩れ、歓喜に湧いたドイツ人たちは、高さ6、7メートルもある壁に上り、大ハンマーでコンクリート壁をたたき壊していきました。一つの民族が壁によって分断され、東側は社会主義体制下に置かれました。東側の住民には、自由も人権もありませんでした。それは28年の年月でした。
- 同じような事実は、旧東ヨーロッパ6ヶ国においても起こりました。私はその当時共産圏伝道をしていた者として、彼らの歓喜の姿を目撃し、感動する人たちの姿が脳裏に鮮明に焼きつきついています。私はルーマニア革命後、3週間で現地入りしました。大人も子どもに一樣に、自由と人権が与えられたことを大喜びしていました。束縛から解放され、自由になったことを体全体で表していました。
- ところで、イスラエルの民も出エジプトできた事実で、歓喜に満たされました。神は彼らを、それから約束の地カナンへ導こうとされました。しかし彼らがエジプトから約束の地に入る道は、荒野の地でした。その旅には苦難がありました。神はそれでも、彼らが「神のことば」（命令）を信じ、従順に従うならば、目的地へ導くと言われました。しかしながら、彼らは神の救いのわざを忘れ、神に不平不満を言いました。

2) 試練下でのイスラエルの民の応答

- 皆さん。これが今日のテキストです。イスラエルは出エジプトしてから、三日後にマサ(Massah:試み)という地に着きました。そこにはナツメヤシ(dates)が少し生えていて、わずかな水しかなく、しかも苦くて飲めませんでした。民は指導者モーセに不平を言い始めました。
- さらに進んで行くと、レフィデイム(Rephidim)があります(出エジプト17:1)。ここでも水がなくて、民は苦しみました。水は人が生きるために一番必要とするものです。水不足、しかも飲める水がないことは、不満が生じても自然かも知れません。しかしどんな欠乏があっても、出エジプトさせてくださった神を信じることは、難しいことではありませんでした。イスラエルの民はそれを信じるべきでした。その時の彼らの応答が、問題でした。
- 民は指導者モーセに向かい、あのエジプトの時代の方が良かった、と言いました。水があり、食物もあった、と悔いたのです。これは今の東欧の国々でも聞かれます。また西ヨーロッパではテロ事件が頻発に発生し、冷戦構造時代の方が良かった、とも聞かれます。最近では、中東イラクにおいてさえ、あの独裁者サダム・フセイン時代の方が良かったと言う声も聞かれます。

イスラエルの民も、同じように奴隷であったエジプト時代の方が、良かったと言いました。そしてモーセを恨み、石で打ち殺そうとさえしました。どんなに感情が激しく燃えていたかが分かります。これが人間です。

- 私たちも人生において試練に遭います。しかし、その時の応答が鍵となります。イスラエルの民は試練に出会った時、神の慈しみ(goodness)と恵み忘れてしまいました。そこで神はイスラエルの民の不信仰を怒り、彼らが約束の地に入ることはできない、と言われました。これがメリバ(争い)(Meribah)の水と言われるべきごとです。
- 問題はどこにあったのでしょうか？ ⇒ イスラエルの民は、

- ① 神への感謝を忘れた
- ② 自分の欲しいものを要求し続けた
(これが人間です)

- ・ 神の怒りは燃え上がり、その不信仰な世代が荒野で滅びるようにされました。ここで教えられる教訓は、主の御声に対して「心をかたくな」にする者は、祝福を手に入れることはできないことです。
- ・ モーセ自身もこのことが原因で、約束の地カナンへ入ることが許されませんでした。その結果、彼らは数ヶ月で行ける距離を、なんと40年間も無意味に、さまようことになりました。

2. 私たちへの教訓

- ・ 話しは、テキストのヘブル人への手紙3章に戻ります。
3:7 ですから、聖霊が言われるとおりに。「きょう、もし御声を聞くならば、
3:8 荒野での試みの日に御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにしてはならない。
3:9 あなたがたの先祖たちは、そこでわたしを試みて証拠を求め、四十年の間、わたしのわざを見た。
3:10 だから、わたしはその時代を憤って言った。彼らは常に心が迷い、わたしの道を悟らなかった。
3:11 わたしは、怒りをもって誓ったように、決して彼らをわたしの安息にはいさせない。」

1) 神の訓練の時

- ・ ヘブル人への手紙の著者は、読者がイスラエル人であるため、詩篇95篇を引用しました。この引用箇所には、出エジプト後のイスラエルの不従順に対する神の怒りが記されています。詩篇95篇の作者はダビデです（ヘブル4：7参照）。ダビデは、先祖たちが荒野で犯した失敗を回顧して、イスラエルの民に同じ失敗をくり返さないように警告しています。彼らの失敗は、荒野で水に関するつぶやきが原因でした。彼らは神の奇跡を見ていながら、いや、体験していながら、つぶやきました。
- ・ 「つぶやき」とは、心の中で「ぶつぶつ」と言うことです。同じことを何度も、何度も、繰り返すことです。
そこには不満があり、感謝心や平安は全くありません。つぶやきは危険信号です。私たちが人生において、「つぶやき」はないでしょうか・・・？
たとえ試練下に置かれようとも、神がそこにいて下さることを忘れてはいませんか。つぶやきの心と感謝心は、反対に位置するものです。

- ・ 詩篇は次のように賛美しています。詩篇103篇

103:2 わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くして下さったことを何一つ忘れるな。

人間は忘れやすいものです。自分が人にして挙げたことは忘れませんが、してもらったことは、忘れ易いものです。なぜなら受け身であるからです。

受け身はモチベーションが低く、あくまでも受動的にすぎません。

信仰生活は受け身ではなく、進んで神に感謝と讃美をお捧げするものです。

{例 話} 路上の「ゴミ拾い」

- 教会の近くに東高麗橋という、高麗文化が伝わった昔からの歴史的な橋があります。どこの会社かは知りませんが、週に一度ぐらいの割合で制服を着た従業員が、ゴミ取りやビニール袋を持って、その高麗橋や路上に散っている「ゴミ拾い」をする光景を見ます。たぶん仕事開始前の、社会奉仕の一環でしょう。お陰で、「ゴミ拾い」が行われた後は綺麗です。じつに美しいものです。
- しかし、何かの理由からでしょうが、それが数週間ストップすることがありました。すると、ゴミがあちらこちらに散っているのが目に入ります。従業員が自分で率先して「ゴミ拾い」をするというより、会社の社会奉仕の一環として、誰かから言われて、「ゴミ拾い」をしていることは明らかです。言われて行うという受け身です。
- ところが、同じゴミ拾いでも異なる「ゴミ拾い」があります。同じく教会のすぐ横に大阪証券取引所があります。そこに朝6時前に、車で現れる3、4人の男女がいます。冬の寒い時期も、夏の暑い時期も、その人たちは集まってきます。こちらは制服ではなく普段着です。
- 彼らは車から「ほうき」、「散りとり」、「ゴミ袋」などを取り出し、あたりの道路上に散っている「ゴミ拾い」をして掃除をしています。それが毎日、いやもう何年も続いていることを知っています。
- まったく彼らの奉仕には、脱帽です。何かの宗教団体と関係があるかも知れませんが、彼らは受け身ではなく能動的であります。受け身の行いはモチベーションが低いですが、率先して行うという能動的行いはモチベーションが高いものですね。
- イスラエルの民は受け身でした。神への感謝と讃美を忘れました。与えられること、恵まれることは自然と考えたかも知れませんが、私たちの生活においても、神のいつくしみと恵みを受けても、神に感謝の心を現わさないならば受け身となります。恵みを受けても、恵みズレしてしまうものです。
- ところで、ヘブル人への手紙の著者は詩篇95篇を引用し、イエスをメシアとして信じるようになった、ユダヤ人クリスチャン (Messianic Jews) へ警告を發しました。この詩篇のダビデの警告と、当時のヘブル人への手紙の警告は、新約時代に生きる今の私たちにも適用されると思います。
- 私たちは今、どのように神の声を聞いているのでしょうか？ そして、御声に従おうとしているのでしょうか・・・？ イスラエルの民はエジプトを出て、40年間も訓練を受けました。それは約束の地に入るまでの訓練期間でした。私たちの人生の旅路にも、訓練の時があります。
- 神は私たちの人生の旅で、訓練されるお方です。では、どうすれば良いのでしょうか。私の好きな「ユダヤの格言」の一つに、「賢者とは自らの失敗からではなく、他人の失敗から学ぶ人である。」があります。聖書は人間の失敗ストーリーの宝庫であります。日本でも反面教師という言葉がありますが、確かに私たちは先人から尊いレッスンを学ぶことができます。私たちには、神の訓練の時が与えられています。
- 聖霊は今、「**きょう、もし御声を聞くならば、・・・心をかたくなしてはならない**」、と語っておれます。

2) 心をかたくなにしてはならない

- では、イスラエルの民の問題点は、どこにあったかと言えば、「心のかたくなさ」にありました。心のかたくなさとは、心を開かず、閉じた状態で、神のことばを受け入

れない頑固な状態のことです。新約聖書には、その「心のかたくなさ」についての箇所があります。たとえば、

- ・マルコの福音書 16 章を開いてください。

16:14 しかしそれから後になって、イエスは、その十一人が食卓に着いているところに現われて、彼らの不信仰とかたくなな心をお責めになった。それは、彼らが、よみがえられたイエスを見た人たちの言うところを信じなかったからである。

- ・この文脈は、イエスが死を打ち破り復活された後のことです。イエスは弟子たちを始め、多くの人々に、復活されたお姿を現わされました。しかしイエスの側近の弟子でさえをも、不信仰で心がかたくなであったと記録されています。当時、イエスの復活後にイエスの姿を見た人たちが多くいました。しかし、信仰は二つに別れました。信じる人たちと、信じない人たちでした。
- ・皆さん。「心のかたくなさ」は、決してイエスの12弟子、当時の人たち、またモーセの時代の人たちだけではありません。私たち人間が持つ弱さです。「心のかたくなさ」は、人がかかえる最大の問題のひとつです。
- ・大切なことは、神が与えてくださったこと、神がなしてくださったこと、神が道を開いてくださったことを、素直な心で受け入れることです。そして神に感謝し、神のみことばに聞き従うことです。もう一度詩篇 103 篇を引用します。

103:2 わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

- ・イスラエルは「心のかたくなさ」のために、40年間も荒野で訓練を受けました（反面教師ですね）。しかし神は不従順な民でも、約束された地カナンへ導かれました（現在のイスラエルを見よ！）。ここに神が語られた約束は、確かであることが分かります。聖書には約束の成就が多くあります。
- ・私たちの人生の旅もそうです。神は神を信じる者を、必ず神の国へ導き入れてくださいます。問題は「心のかたくなさ」のために、旅路を遠回りし、多くの苦勞をしまうことです。人生は一度しかありません。
- ・では、どうすれば良いのでしょうか？ → ヘブル人への手紙は教えています。
3:7 ですから、聖霊が言われるとおりに。「きょう、もし御声を聞くならば、
3:8 荒野での試みの日に御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにすることはできない。

- ・ここで大切なことを学びます。

① 聖霊が「きょう、もし御声を聞くならば」と言われることです。

神が語りかけてくださり、御声を聞くことができるのです。どこで、でしょうか？ ⇒ 神との出会いの場所です。

神への礼拝の場所でもあります。そこはある時は、聖日礼拝の公の場所でもあります。あるいは個人のディボーションの場所でもあります。また、主にある聖徒たちとの交わりの場所でもあります。神は私たちにいろいろな方法で、語りかけてくださるお方です。その時、大切なことは、

② 「心をかたくな」にしてはいけないことです。

- ・ペテロはイエスから持ち舟を貸して欲しいと言われた時、そのことばを受け入れ小舟を提供しました。ルカ 5 章
- ・取税人ザアカイは、イエスが「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」（ルカ 19:5）

と言われた時、木の上にいたザアカイは急いで降りてきました。

- ・伝道者パウロは、ダマスコへの途上でイエスの声を聞いた時、彼はイエスのことばに応答し、生涯を神に捧げました。
これら3人の共通項は、神の御声を聞いた時、速やかに応答したことです。

- ・では、どうすれば、心を閉ざすことなく、開くことができるでしょうか。「心のかくなさ」は、私たちが人力でどうすることも出来ない弱さです。この弱さに打ち勝つ方法は、ただイエス・キリストの十字架にあります。この戦いは、自分の内なる人との戦いです。

- ・自分の「心のかたくなさ」を素直に、神に申しあげることです。それは祈りによる告白です。イエスが十字架にかかってくださったことは、私たちが肉の弱さに勝利するためです。1ヨハネ1章

1:9 もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

- ・私たちはみことばを聞いて、信じて歩む者です。2017年の信仰生活の旅、それがどんな旅であっても、神への感謝と讃美を忘れてはいけません。私たちはイスラエルの民の教訓から学びました。
あなたは今朝、どんな御声を聞かれたでしょうか・・・？

まとめ

主 題：「きょう、もし御声を聞くならば」
一心をかたくなにしてはいけない

- ・選民イスラエルの民の「こころのかくなさ」は、私たちに大切な教訓を教えてください。それは自分との戦いです。
- ・私たちは人生の旅を、どのように歩むでしょうか。遠回りし、苦勞しない旅を送るために、どうすれば良いでしょうか？

1. 先人イスラエルの民の教訓から学ぶ

「きょう、御声を聞くならば」、従順であることです。

そのためには、イエスの十字架の前に日々出る必要があります。

2. 神に感謝と讃美をお捧げする

「わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」詩篇103:2

- ・信仰生活の旅は、どれほど感謝と讃美を神に捧げられるかが鍵です。

* God bless you!